

見知らぬ土地で、若犬は、名前のない野良犬となった。

来る日も来る日もあてもなく彷徨った。

それでも、置き去りにされたのは何かの間違いで、いつか飼い主がまた迎えに来てくれるのではないか、と川沿いを彷徨い、民家の辺りを少し歩いては、また川の見えるところに戻る事を繰り返し、なかなか河川敷から離れがたかった。

いつしか若犬は、川沿いに広がる牛のいる牧場に迷い込んでいた。

乳牛たちがあちこちでのんびりと草を食んでいる。

若犬は、やるせなく彼らを眺めた。

もう何日もろくにもの物を食べていない彼は、空腹で何をやる気力も失せていた。

「君、どこの仔？」

不意に後ろから声がした。

振り返ると、色艶も美しいすらりとした大きな犬が、若犬を見下ろすように立っていた。

「あ、こんにちは……あのお……ここは何処ですか？」

「此処は牧場だよ。僕はアレックス、此処の番犬さ。ぼうや、遊びに来たのかい？ 此処はいろんな奴が遊びに来るからね。でも、中にはあまり素性のよくない奴らもいるのさ。それで僕はこうして見回りに忙しいんだ……あ、また牛がはぐれた……行かなきゃ——」

キビキビとしたその犬は走りながら、振り向きざまに

「ここにいてもいいけど、一休みしたら帰ってね。悪いけど君と遊ん

でいる時間はないんだ、ごめんね。あ、それから、埒の中には入らない  
ほうがいいよ、じゃあねー

「あ、あの……」

悪気もなくそう言うと、アレックスと名乗るその犬は、牧場の草原を  
駆け下りて行ってしまった。

「行っちゃった……」

他所の犬がこれほど眩しく見えたことはなかった。

同時に自分がひどく情けなく思えて、なんだか腹が立ってきた。

「僕は遊びに来たんじゃないんだ……おうちに帰りたいんだー」  
しばらくうつむいていたが、

「そうだ、うちに帰ろう！ 迎えを待ってるんじゃないくて、自分でう  
ちに帰るんだー」

若犬は意を決して立ち上がると、大きく体をブルブルっとふるって毛  
皮についた枯れ草などのゴミを振り払い、再び川沿いの道を歩き出した。

牧草の続く道をしばらく行くと、とんがり屋根の建物が見えてきた。

仲間の気配がする。

「そうだ、あそこで誰かに聞いてみよう」

そう思った若犬は牧場の番犬アレックスの忠告をすっかり忘れて、柵  
の中へと入っていった。

柵に沿ってパンジーの咲く花壇が続き、やがて建物の前庭のような広  
い処に出た。

ポクポクとした土の道が、ぐるりと丸く前庭を囲むように円を描き、  
その中央にも牧草が広がってクローバーの白い砂糖菓子のような花があ  
ちこちに咲いている。

若犬はその広さに所在無く、すぐ脇に生えているオリーブの木陰に  
入って辺りを眺めた。

広場の向こうには、白い窓枠のある茶色い下見板の細長い建物が、  
ずっと延びている。

……あそこは何だろうか。

そのとき、横から不意に声をかけられた。

「よう、見慣れねえ小僧だな」

びっくりして振り向くと、大きな茶色いムク犬が、木陰と植え込みの  
間に座り込んでいた。

その姿は、自分より二まわりほども大きいだろうか。その薄茶色の長  
く荒れた毛並みはところどころ燃れて艶もなく、見るからに野良犬だっ  
た。しかし、その眼光の鋭さには、相手を圧倒する力があつた。

若犬は、一瞬たじろいで一步下がった。その瞬間、両者の優劣が決ま  
り、若犬は尻尾をしゅんと下げた。

ムク犬は、じつと建物の方を見て何か様子を窺っているようだった。

「お前も此処の獲物を狙ってきたのか」

若犬は少し怖かったが、勇気を出してムク犬に問いかけた。

「あ、あの、おじさん……教えてください……此処は、何処なんです  
か？」

「小僧、お前この辺のこと何も知らないのか？ 見たところ、何処ぞ  
にうっちゃられた口だな……」

「こ、こぞ……僕……、小僧じゃないよ。僕の名前は……」

名を告げると、その大きなムク犬は、うんうんと頷きながら

「そうか……おらあゴンだ……」

視線を建物にむけたまま続けた。

「いい名だ……でもな小僧、もうその名じゃあ誰もお前のこと、呼ん  
じゃくれないぜ」

「え？……」

「もうお前は野良なんだ」

「でも、おじさん……」  
と、何かを言いかけたその時、突然、建物の方でおおきな音がして騒がしくなった。

人の怒鳴り声と共に、ニワトリの騒ぐ鳴き声が響いた。

「ややっ！ 俺様の前に誰か既に来ていたか……あっ！ あいつ……」

建物から、赤茶色の痩せた犬が走り出て、途中で銜えていた獲物を取り落とした。拾いに戻るには、後ろから人間が棒を持って追ってきた。

「まずいつ！ おい、小僧！ 逃げろっ！ 捕まるぞ」

ムク犬のゴンはダツと走り出した。戸惑う若犬も、何がなんだかわからずに、走り出した。

しかし、それより早く農場の男が、長い棒を持って犬たちに向かって追ってきた。

棒を振りながら、男は怒鳴った。

「何だ、まだ仲間がいたのか！ このやろう！ 今日という今日は容赦はしないぞ！」

男は怒鳴りながら、長い棒を槍のように振り回し、低く円を描くように地面近くの空を切った。なぞるように振り回された長い棒が、若犬の肢を直撃した。

「きゃくん！」

思わず、悲鳴を上げた若犬は、その場に転んで一回転した。

「もう、走れない……」

横倒しに転んで、あまりの痛さに息も止まりそうになった時、ゴンが吼えた。

「おきろ！ 走れっ！」

若犬は、必死になって身を起こし、走り出した。

男が続けざまに2投目を打ち込むには、振り回した棒が長すぎた。

あやうく若犬は、栗の木でできた柵の下に潜り込み、二度目の棒の追撃は、其の堅い柵の横木に当たって、へし折れた。

二打目は危うく逃れた。

「悪運の強い奴だ！ 今度来たら、ミンチにしてやるぞ！」

男の怒鳴り声は背中に響きわたって、身もすくむばかりだった。

そのまま、柵をくぐり抜け、広い原っぱに出た。

ムク犬のゴンは、どンドン先を走っていく。後を追う若犬も、片脚を引きずりながら、痛みをこらえて走り続けた。

二匹は、原っぱを走りに走った。

つづく